雪掛け布団
南海部覚悟

「父さん、風が出てきた。磯のお客さん大丈夫かな？」
「北の岩場に白波の見えて来たげな、客には悪かけど、回収させてもらうかい・・・・。」

ヘッドセットを耳に押し当て、スマホのキイを叩いて、磯に送り届けたばかりの釣り客のリーダーを呼び出しました。
「申し訳ありません、御覧のように急にしけてきました、大事になるといけませんので、残念ですがお迎えに参ります。納竿の準備お願いいたします。」
不満そうなリーダーのうめき声を聞き流しながら、渡船の船頭は礒に船首を向けます。
いつもなら、昼過ぎまで港で待機して、釣り客の納竿時間と同時に迎えに出港するのですが、この日は前日の海上予報から、念のため磯の沖合で錨泊していました。
長男が舳先に立って船着きに誘導すると、馴染の釣り客8人が手際よく乗り込んできます。
「静かなもんだぜ親父さん！雨も降ってねえし寒くもねえし、大丈夫なんじゃないのか？」
「いや、北の岩場に白波来てますんで、それが目安なもんで・・・・。」
「齢喰って、用心深くなったのか・・・・なあ大学生！」
冬休み中の長男に不満の矛先が向かいます。
「勘弁してください、ほら西の空もどんより曇ってーーー。」
そこまで言って、西の空に視線を投げた船頭の、口をあんぐり開けたまま顔色が変わりました。
「どうした？親父さん。」
「この時期、あんな雲初めてですよ。何か悪かこつ起こらんばいいが・・・・。」

その時、玄界灘の西の空は、異常に白く輝く雲の壁に、遥か上空まで覆われていました。一面に朝日を反射して、さながら夏の巨大な入道雲（積乱雲）の壁のようでもあり

ます。
同じ雲を、糸島半島北岸の絶好の位置から見下ろす別荘地がありました。
玄界灘に面する山の斜面に大手企業の保養施設が点在して、年末・年始の長い休暇を、多くの企業ビジネスマン家族がここで過ごし、クリスマスの華やかな飾りつけも、既に数年来の恒例となっていました。

「何か、妙な天気だのう・・・・生温かくって湿っぽくて。」
「雨が降ってくるのかね？でも空は明るいし・・・・。」
海を見渡せる大きな窓の前で、初老の夫婦がコーヒーを啜っています。
「今朝の予報では、午後から雨だって言ってましたわ。」
アイランドキッチンの奥から若い女性の声が答えます。
「でも、ありゃ冬の雲じゃないのう、真っ白に輝いとるげな・・・・やっぱ、温暖化のせいじゃろのう？60越えて初めて見る雲に、最近よう出くわすわ。」
キッチンの横のドアが開いて、可愛い赤ん坊を抱きかかえた青年が入ってきました。
「テレビ局から召集の連絡があった、午後からかなり荒れそうだ。」
「出かけるの？」
湯気の立つマグカップを渡しながら、若い妻が尋ねます。
「今夜は遅くなりそうだ、夕食は済まして来るから先に寝ててくれ。」
熱いココアを啜りながら夫が答えます。
「父さんたちも気兼ねしないで寛いでくれよ、やっと予約が取れた保養所なんだから。」
12月23日の朝です、知り合いを通じ一年前から予約しておいた、或る企業の保養施設で、両親を含めた家族で、この冬のクリスマスを一緒に過ごすつもりでいました。
夫は、地元福岡の大学に所属する気象学の講師の傍ら、気象予報士として、テレビ局の番組を監修しています。休暇中に招集がかかるのは、多分気象台から緊急の情報が入電したのに違いありません。
建物の屋上に設けられた駐車場に、半島の山の斜面を駆け上がった北東の風が吹きつけ始めました、生温かい湿った空気です。
「温かい湿った木枯らしか・・・・何なんだいったい？」
スマホにドライブ用のインカムを装着し、気象台の知合いをコールしながら、急いで車を出しました。

「おい！客を送ったら漁に出るぞ！」
「なんだ父さん、今日はこれで上がるんじゃないのか？」
「なんば言うとるか！今はアラの最盛期じゃろが、ぐたぐた言うとらんで段取りせんかい！」
「北の岩場に白波たっとるから、用心して客に納竿して貰ったのは、父さんだぜ！」
「釣り客は素人じゃろが！俺たち玄人が波風怖がってどげんすんじゃ！」
「俺は、学生なんだが・・・・。」
「ぐだぐだ言うな！せからしいわ！」

8人の釣り客を漁港に送り届け、軽い昼食を摂った後、漁師親子は再び舟を沖に向かわせます。
「あん白か雲の向こう側は、きっと潮目のちごうとるじゃろ。アラは無理でもブリはおるかも知れんとよ。磯に釣り客渡すときゃ船頭じゃが、漁にでるときゃ漁師たい。」
沖は午前中より寧ろ凪いでいました、進路を西にとり、一時間ほどであの雲壁の根元にたどり着きました。
白い霞が一面に拡がり視界がききません、霧雨のような細かな雨が降っています。
「父さん、何だか冷えてきた・・・・雨がみぞれに変わりそうだ、海面が何だかごつごつしている。」
「そこのジャンパー羽織りない、廻りをよう見とかんば、いかんぞ！」
海面のごつごつが、舟の舳先の廻りから盛り上がってきました、透明のガラスのような細かな塊が、キラキラ輝きながら無数の棒状に立ち上がります。
「氷だよ父さん！海が凍ってる！」
その時、強い衝撃があってエンジンが空転しました、舟がゆっくりと速度を落とし、やがて停止します。
「くそ！スクリューやられた！」
氷の塊が、スクリュープロペラに絡み、破損したようです。

舟のエンジンが停止した海は、一面シャーベットのような薄氷に覆われ、風も波もなく、静寂に極まっていました。
「こげん海は初めてじゃ！」
「父さん、何だか不気味だよ。早く帰ろう。」
「帰ろうにもスクリューが・・・・そうじゃ、お前の大学からテストば頼まれとった何ちゃらプロペラ、まだ両舷に付けたまんまなんじゃが。」
「シュナイダープロペラかい？」
「そう、それじゃ！海藻避けのケージが付とるけん、氷の中でも回るじゃろ。」
「じゃ、クラッチをジェネレーターに切り替えて、エンジン始動だ！でも、スクリューよりスピードでないから、漁港まで2時間はかかるよ。」
シャーベットの海に、漁船のエンジン音が再び響き渡ります。

「どうなってるんだいったい！」
テレビ局のブリーフィングルームに駆け込んだ夫は、ひどく苛立っていました。
「気象台からまだ警報の連絡はないんですか？」
「各メディアの気象担当に、スタンバイの連絡が1時間前にあったきりで、警報はまだ出されていません。」
気象担当のADが答えます。
「天気図をモニターに出してください！」
ADがテーブルの上のノートパソコンを起動させます。
「15分前に気象庁から入った最新版です。」
それを見て夫の顔色が一変します。
「なんだこれは！」
その時、夫の携帯が鳴りました。管区気象台に勤める友人からです。
「待ち侘びたぞ！」
「悪い、とても手が空かなくて・・・・最新の天気図見ているか？」
「ああ、九州の西で南北に前線が伸びている、この時期こんなの初めてじゃないか？」
「次のページに同時刻の衛星写真があるだろ、前線から西は真っ白だ・・・・荒れるぞ、大雪になる。」
「どうして警報出さない？」
「気象庁の確率予報が確定しないんだ、スーパーコンピューターの計算結果に何か問題があるらしい。」
「だから、パラメタリゼーションに頼り過ぎるなって言ってる。」

「そう苛立つな、恐らくお前の言うポーラーサイクロンの南下だ、極渦の中心はバイカル湖の西側にある、逆に日本海上空は相変わらず高温・多湿だ。」

電話を終えた夫に、担当ADが詰め寄ります。
「先生、どういうことですか？気象キャスターに伝えますから、分かり易く説明してください。」
当惑した学者の、暗い視線がADに注がれます。
「ーーーまず、福岡が日本海側気候にも関わらず、どうして雪が少ないか分かりますか？」
「九州の一部だから・・・・じゃないんですか？」
「朝鮮半島に面しているからです、日本海のような大きな海が間になくて、大陸からの寒気が充分に水分を補給できない、朝鮮半島がなければ、北部九州は東北や北陸同様の豪雪地帯になります。」
「先程の天気図を見ますと、高い海水温を反映して日本海上空の大気は、現在異常なほど高温・多湿です。一方東シナ海には、大陸から寒気が吹き込んで、五島列島の西から朝鮮半島西岸・黄海・満州中央部を縦断するように、南北に長い寒冷前線が伸びてきました。この前線目掛け、日本海から強い北東の風が吹き込み始めています。やがて、前線が東に移動し朝鮮半島を通過すると、海水に温められない極寒のシベリア寒気団が、朝鮮半島の陸地を伝って九州に流れ込んできます。日本海の風向きから考えて、この二つの大気がぶつかり合う中心は、恐らく北部九州上空です。」
「それで、これからどうなるんです？」
「大寒気団に、日本海から大量の水分が供給され続けるんです、大雪になります。温度の違う大量の空気が混ざり合いますから、強い上昇気流を伴い、台風並みに温帯低気圧が発達して、猛烈な風が吹きます。」
「吹雪ですか？」
「**A**級ブリザードです！」
「なんで、大雪警報が出ないんですか？」
「原因が、北極の寒冷渦の南下にあるからだと考えられます、通常はその中心が北極海にありますが、今年はシベリアまで南下しています。恐らく気象庁の数値計算に、そのパラメーターがうまく取り込まれていないから、算出した確率が収束しないんだろうと思います。」
その時、別のADが部屋に駆け込んできました。
「警報です！発令されました。福岡県・長崎県・佐賀県全域に大雪警報・暴風雪警報です！」
「よし！ティロップの準備、ライブで緊急気象情報をスタンバイして！」
テレビ局の報道フロアが一気に慌ただしくなりました。

漁港を目指した親子の漁船は、もう2時間以上走り続けていました。
雲の根元から離脱すると、流石に海に氷は無くなりましたが、相変わらず強い北東の風が吹いています。
操舵を長男に任せ、漁師は退屈そうに船尾で横になっています。
「ほんなこつ足の遅かあ、港に着くんは夜になるちゃなかか？」
空に向けて大欠伸をした途端、白い冷たいものが口を蔽い、喉の奥で息が詰まりました。
「何じゃこりゃ？雪かあ、雪の塊じゃなかね！」
気が付いて周囲を見渡すと、縦横30ｃｍはあろうかという雪の塊が、ふわふわ無数に落ちてきます、見る見る漁船の甲板が白くなりました。
「いかん！舟に雪の積もりよる、全速力出さんかい！」

糸島半島の別荘地にも雪が降ってきました、既に周囲の山は白くなり始めています。
若い妻の携帯に夫から電話が掛かっています。
「で、どうすればいい？お父さんの軽で、赤坂のマンションに帰った方が安全？」
「親父の軽はスタッドレスじゃないだろ、もう間もなく大雪になる、軽で出掛ける方が危ないんじゃないかな。」
「でも、風も強いしマンションの方が安全じゃ・・・・。」
「其処の保養所も鉄筋コンクリートだよ、クリスマス用に買い込んだ食料もあるし、インフラさえ生きていれば、2～3日は大丈夫だろ、避難勧告や避難指示が出れば、管理事務所が対応する筈だから、安心してそこで待ってなさい。」
「じゃ、今夜は戻れないのね。」
「明日の朝までには吹雪も治まる、道路の除雪が終わったら、直ぐに戻る

から・・・・。」

保養所の、海が見えていたガラス窓は、既に陽が落ちて暗くなっていました、大きな雪の暗い影が、次から次へと落ちてくるのが見てとれます。
部屋の照明が明滅して、一瞬のうちに真っ暗になりました。
「停電だわ！」
ベビーベッドの赤ん坊を抱きあげながら、若い妻が叫びます。
暫らくして、管理事務所から電話が掛かってきました。
「別荘地への送電線が雪の影響で、断線したようです。下の集落の公民館に避難所を確保しました。今、マイクロバスを巡回させますので、それに乗って避難してください。」
「避難勧告が出たのですか？」
「勧告は出されていませんが、水道のポンプが作動しませんので、あと2時間ほどで別荘地全ての水が出なくなります。ご希望があればJRの駅までバスでお送りしますので、どうか宜しく。」
準備を終えて、屋上の駐車場に上がってみると、既に膝まで雪が積もっています。
父親が玄関にあった竹箒で、取り付け道路まで除雪を終えると、タイヤチェーンの耳障りな音をたてながら、小型のバスが乗り込んできました。

「父さんだめだ、風が強すぎて東に進めない、近くに入港できる港は無いか？」
「頼りにならん機械っちゃなあーーーじゃ、南に舵をとれ！野北の漁協に無理いって留めさしぇて貰おう。」
「頼りにならんたって、これは港湾作業用の推進器じゃあけんな、外洋を高速で走るもんじゃないんじゃ・・・・大体、アラじゃブリじゃって欲出したおやじが・・・・。」
「ちょい黙れ！なんか音のしぇんかったか？」
「父さんあそこだ！海岸の崖の下にバスが！」
暗くなった半島の波打ち際に目を凝らすと、2条の光が空に向かって立ち上がっています、小型のバスのヘッドライトの光です。

「上の道路から崖を落ちたんだ！父さん、助け呼ばないと！」
「無線で漁協に連絡！いや、携帯で直接110番した方の早やか！」
長男が集魚灯（サーチライト）を崖下に向けると、何人かが立ち上がって手を振ります。
「怪我人はいませんかあ～！」
舟に備え付けのハンドマイクで、大声を出します。
「負傷者が2人いる！赤ん坊もいるから直ぐに助けが欲しい！」
バスに備え付けのハンドマイクで返答があります。
「おい、あそこに舟着けるぞ！」波打ち際を指差しながら船頭が叫びます。
「冗談だろ！岩場だぜ父さん、波も高いし・・・・。」
「四の五の言わんちゃよか！人が助け待っちょるんじゃ、助けんでどげんするとか！」
「シュナイダープロペラ、海底の岩で擦ったら、漁港に帰れなくなるぜ！」
「心配せんでよか！この辺は柱状節理ゆうてな、岩の下はどん深たい、廻りの岩にぶつけんよう舳先持って行きゃ、何とかなるとよ。」
一対のシュナイダープロペラがここで実力を発揮します、舟の前後移動・水平スライド・斜方スライド・360度旋回、お手のもので、軽快に岩をかわしながら舳先を波打ち際に近づけます。
「ゆっくり慎重に！上手いもんじゃなかね！よ～そろ、よ～そろ。」
操船する長男を珍しく褒めます。
岩と岩の間の小さな入り江に、上手く舳先を入れることが出来ました。
そこでいっぱいにエンジンを吹かし、渡船のホースヘッドを岩に押し付け固定します。
それでも波を受けて上下に激しく動揺するのを、タイミングを見計らって船頭が岩場に飛び移りました。
「何人居るとね！」
「赤ん坊含めて8人だ！」
若い母親から、おんぶ紐の赤ん坊を受け取った船頭が、大きな背中にそのまま背負い、再びタイミングを見て渡船に帰ってきました。
その後は、ホースヘッドの手すりに自分の腰をロープで固定して、飛び移るバスの乗客に手を貸します。負傷した2名も何とか自力で飛び乗り、若い母親の手を掴もうとしたその瞬間、巨大な雪の塊が正面から船頭の顔を襲い、視界を失って母親の手をつかみ損ねてしまいました。

暴風雪に翻弄された悪夢の一夜が明けました。
保養所の家族は、糸島市の医師会病院に収容されています。
渡船に救助された後、野北漁港からこの病院まで、他の乗客と一緒に緊急搬送されたのです。
船頭がその手を掴み損ねた若い妻は、あやうく渡船から滑り落ちそうになりましたが、着ていたコートのベルトが手摺に引っ掛かって、間一髪、事無きを得ました。
その他、何れもかすり傷程度で、バス事故の大きさを考えると、奇跡的に幸運でした。
袂では、病院の用意したベビーベッドの中で、赤ん坊がすやすや寝ています。
「息子はまだ来ないかね？」
「雪がやまんと無理じゃろ母さん・・・・道路も除雪せんと。」
「雪はもうやんでますわ！」
若い妻が病室のカーテンを開け放つと、朝日が白銀の世界に何度も反射して、誰もが額の上に掌を翳しました。

雪は、この家族が助けられた直後から、更に一層強く降り始めました。
北部九州のあらゆる交通インフラを遮断し、電気・水道といった設備インフラも、山口県を含めた広範囲で、深刻な状況に陥っていました。
雪が降りやんだ朝6時前後は、いつもなら人々の動きが始まる時刻ですが、深夜から除雪作業が継続されていた福岡市中心部の主要道路以外、車が行き交う気配がありません。
電気を失い、暖房もままならぬ其々の自宅にあって、人々は寒さに震えていました。
管区気象台の発表によると、福岡市のこの朝の積雪量は140ｃｍ、内陸の飯塚市では190ｃｍ、英彦山山頂の観測所で、24時間の降雪量が実に280ｃｍで我国観測史上最高となりました。
沖縄の那覇に、観測史上初めて積雪が記録されたのも、この朝のことです。
国際通りのシーサーが、薄っすらと雪化粧した動画は、全国のニュースで配信され、多

くの国民が驚きをもって見ました。
福岡では早朝から警察や消防に、多くの緊急電話が集中しました。
マンションのバルコニーで、凍結したステンレスの手摺に、掌が貼りついて取れなくなったという、信じられないものもありましたが、特に多かった救助要請が、屋根に穴が開いて雪の塊が部屋に入ってきた、というものでした。
後日詳細を分析したところ、同様の障害は比較的新しい木造住宅に集中しているようで、軽量化の為の細い垂木や母屋が原因のようです。
新しい住宅構造の主眼が、風や地震による水平力に集中し過ぎた弊害が指摘されました。
住宅を襲った更なる障害にすがもりがあります。
こちらは、屋根や天井に断熱材が存在しない古い住宅に多く発生しました。
屋根に積もった雪の底が直下の部屋の暖気で融け、瓦を伝って流れる訳ですが、軒先の雪は温められずに凍結しているので、その辺りに水が溜まり、屋根のこう配に沿って水位が上昇します。やがて瓦の隙間に侵入した雪解け水が、天井一面を水浸しにするという内容でした。
九州で同様の報告がなされたのは、今回が初めてでした。

寒冷前線が過ぎ去り、雪がやんでも強烈な寒波は居座ったままです。
除雪が進んで、主要国道の通行が再開されたあたりから、新しい交通障害が発生し始めました。
圧雪された道路表面が、夜間凍結し、いわゆるミラーバーンとなって追突事故が多発したのです。
普段雪の無い地域のこと、ミラーバーンの走り方など誰も経験がありません。タイヤが滑り始めて、初めてブレーキを踏み、ハンドルを切るものですから、もう車は絶対に止まりません。
雪がやんで3日間で、福岡県の全登録車の約1／3が、何らかの事故に遭遇せざるを得なかったのです。

「みんな大丈夫か！バスの事故に遭ったんだって！」
夕方近くになって、テレビ局からやっと夫が駆けつけてきました。
感極まって抱きついた妻が、夫の胸に顔を埋めます。
「一緒に乗ってた保養所のご近所さんが二人、怪我をしてここで治療を受けてるわ。」
「もうあの保養所には戻りたくないねえ、何とかお前たちのマンションに行けないかね・・・・。」
「そのつもりだよ母さん、うちのマンションでクリスマスをやり直そう。」
「高速は走れるの？」
「国道を時間をかけて帰るしかないな・・・・それもかなり危険なドライブになる。」
「何かあったの？」
「前原駅の前の交差点で大きな事故があった、車が何台も折り重なって山みたいになってる・・・・。」
「電車は？」
「まだ不通だ・・・・JR西日本から除雪車両を移送してるようだけど、筑肥線に入るのは明日の朝になるらしい。」
「助けてくれた船頭さんに礼をせんといかんわい。わしの、軽も取りにいかんとなあ・・・・。」
「そんなことはずっと後でいいよ父さん、福岡が正常に戻るのは、1・2週間先のことだ、年明けまでうちのマンションに居なさいよ。」

「くっそ！スクリュー直すのにまた金の掛かる、年ん瀬に大損こいた！」
「自業自得だよ父さん・・・・さっき野北の漁協が無線で、警察から報奨金が出るようなこと言ってたけど？」
「ほんなこつかい、そりゃ！」
船尾から身を乗り出します。
所属する漁港に廻航する途中、親子の渡船の右舷に拡がる福岡の海岸線は、遥か先の山並みまで視界が透って、一点の陰りもなく純白に輝いていました。

「昨日のごたる雪、何ちゅうか知っとうか？」
「どういうの？」
「雪掛け布団っちゅうげな。大雪が布団みたごつ空から降っちくる・・・・昔、東北ん漁師に聴いた話したい。」
凪いだ玄界灘にイルカの群れが、渡船の周りを並走し始めました。

終わり。

以上全てフィクションです、登場する個人・団体とは一切関係がありません。

奥付

雪掛け布団

http://p.booklog.jp/book/111644

著者：南海部　覚悟
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/111644

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト